

---

---

# 海野十三の作品における「他者」としての地球外知的生命像の変遷 —大戦期を挟んだ作品に注目して—

Changes in the depictions of intelligent extraterrestrial life as “the Other” in the works  
Of Unno Jūza

—Focusing on his works straddling World War II—

●  
須藤 勲  
千葉工業大学社会システム科学部  
教育センター准教授

●  
Isao Sudo  
Education Center, Faculty of Social Systems Science,  
Chiba Institute of Technology, Associate Professor

●  
2015年9月18日受付

●  
Received : 18 September 2015

---

The focus of this study is several works by Unno, an author of science fiction and detective novels where extraterrestrial life appears. These novels, which were written in the period from before World War II until after its end, are considered and compared here in order to understand the changes in Unno's idea of “the Other” across this period.

In his full-length novel *Kasei Heidan* [Mars Army Corps], Unno depicts Martians as the enemy. One can clearly observe in this novel the historical backdrop of Japan preparing to go to war. The plot of another novel, *Kasei Tanken* [Mars Expedition], which was written during the American occupation of Japan following the war, begins in America and incorporates a diverse cast of characters consisting not only of Japanese but of Americans and Chinese people as well. The Martians that appear in this work are not warlike, but rather belong to a race that is able to understand and be understood through peaceful discussion. The novel also portrays cultural exchanges between Earth and Mars through music—*Kasei Tanken* depicts the possibility of a peaceful and civilized cultural exchange between Earth and “the Other” (namely, between Japan and foreign countries) .

キーワード：海野十三（佐野昌一）、SF小説、地球外知的生命

---

## 0. はじめに

戦前から戦後にかけて、主に少年向けのSF（サイエンスフィクション）作品や推理小説の分野で活躍した作家海野十三（本名佐野昌一：1897-1949）<sup>1)</sup>のいくつかのSF作品に注目し考察を行う。海野は日本のSF作家の元祖ともいわれるように、まだ日本でSFというジャンルが普及していなかった時代に、その想像力によって次々と新しい物語を作り出してきた。1920年代後半から作家として活動を始めた海野は、当時だれにも到達したことの無い未知の空間であった宇宙を題材にしたものや、人造人間（ロボット）を題材にしたものなど、現代のSFにつながる物語を数多く書いている。作家小松左京（1931-2011）は、「SFの思考法の特徴は、物事を相対化する、ということだと思う」<sup>2)</sup>と述べている。物事を相対化して見るためにまず必

要なのは、比較できる対象である。SFというジャンルでは、その時代においてよく知られたもの（既知のもの）だけでなく様々な「未知のもの」を登場させることができる。現実には存在していない（あるいは確認できていない）人間以外の存在を想像することは、人間とその社会を相対化して見る機会をわれわれに与えることになる。自分以外の「他者」の存在があってこそ、人間は自分を相対的に見ることができるのである。

本論では、「未知の存在」である地球外知的生命の登場するいくつかの作品に注目し、「他者」としての「未知の存在」がどのように描かれてきたかについて考察を行う。海野は様々なタイプの地球外知的生命を描いている。それらを比較し、なぜそのような地球外知的生命像を作ったのか、時代背景も視野に入れながら分析を行う。海野は日本

のSF史の初期に活躍していたが、大学で電気工学を学び、卒業後は通信省電務局電気試験所で真空管の研究をしていたという経歴を背景に、科学者としての知識を活かし、地球外の生命体や、人造人間など、様々な種類の「他者」を作品の中に登場させている。本論で主に扱うのは、地球外の知的生命との接触がテーマとなっている小説である『火星兵团』、『地球発狂事件』、『火星探検』という、3つの作品である。

地球外知的生命とは、長い間想像されてはいても、いまだ人類が遭遇したことの無い存在である。海野にとって、未知の場所としての宇宙は、想像力を働かせるための自由な空間として機能していたといえる。彼はその中でも生物生存の可能性が主張された最も近い星である火星を題材としたものを多く残している。火星への注目は19世紀末に始まっている。1877年、天文学者スキアパレリ(Giovanni Virginio Schiaparelli:1835-1910)が望遠鏡で火星の観測を行い、表面に溝のようなものを見つけたと主張し、それが「火星の運河」として広まり、人々の関心を集め、その後アメリカの天文学者ローウェル(Percival Lowell:1855-1916)が「火星」の存在を主張し話題となった。そのように火星への関心が高まる中で、イギリスの作家H. G. ウェルズ(Herbert George Wells:1866-1946)が『宇宙戦争』(The War of the Worlds:1898)<sup>3)</sup>を書いている。この物語では、突然イギリスに「火星」(Martian)が襲来し、その人類を凌駕する科学力によって人類は追い詰められていくことになる。ウェルズの火星人像が読者に与えたのは、発達した科学力によって、脅かす敵などいないと考えていた人類を超える力を持った存在が宇宙にはいる可能性があることへの驚きであった。

19世紀後半から地球外の生命の可能性に目が向くようになっていった理由は、科学技術の発達もあるだろうが、絶対的な「他者」が失われていた時代ということもあるのかもしれない。コロンブスから始まった大航海時代を経て世界が繋がっていく中で、未知の場所と、そこに住む未知の存在としての「他者」は次々に既知の存在へと変えられていった。他者との接点としてのフロンティアが失われ、地球上のほとんどの場所が既知のものになったとき、人間の空想力がいまだ到達できていない場所としての宇宙へ向かうのも当然であったのかもしれない。海野は本論でのちに扱う小説『地球発狂事件』<sup>4)</sup>において、地球外知的生命の地球への到達について、「新しいコロンブスは、地球の外から到着したのだ。遂に到着したのだ。われわれは、昔のインディアンと同じような驚愕と困惑にぶつかった」(全集11, 65ページ)と登場人物に語らせている。

一般的に言って、「未知のもの」について想像することは、「既知のもの」を(意識はしていなくても)参考にせざるを得ない。われわれは、真に未知のものについては想像することすらできないのであるとすれば、たとえばまだ出会ったことのない地球外知的生命について考えるときにも、既知のものの影響が現れているはずである。従っ

て、虚構の中の地球外知的生命像の姿を見ることは、人間について知るための鏡にもなる。海野の描く他者としての地球外知的生命に姿を見たとき、その背景にある時代の変化と人々の在り方を読み取ることができるだろう。

## 1. 敵としての火星—『火星兵团』

1939年から1940年にかけて「小学生新聞」に連載された長編小説『火星兵团』<sup>5)</sup>では、地球への侵略者としての「火星」が登場する。火星によって形成される「火星兵团」が地球人を捕虜にしようと襲来し、地球人がそれに対抗するという話であるが、火星兵团の襲来だけではなく、彗星の地球への衝突が迫っているという、危機的状況が描かれている。はじめは「火星兵团」が最初に現れた日本を舞台とし、やがては世界規模に発展していく。

この作品では、地球外知的生命としての「火星」は、基本的に「敵」として登場する。侵略者という外部からの敵に対して地球人は自己防衛のために戦わなくてはならない。さらに地球人には、「火星に行かざるを得ない理由」としての、「モロー彗星」の衝突の危険という事実も存在する。大きな彗星が地球に衝突することがわかり、そのままでは全人類が消滅するしかないという事態を前にしたとき、地球では火星への移住が検討されることになる。「生存」のためには火星に向かわざるを得ないという状況である。一方、火星人は地球人を「家畜化」するために地球に来ている冷酷な集団であった。それは火星人を「敵」とみなすのに十分な理由であった。地球人類と火星人とでは共存は不可能であり、戦いによってどちらが生き残るかを決めるしかない状況が作られる。このような状況は、当時の日本の置かれた状況とも比較できるだろう。

火星人が地球に突然やってきて攻撃してくるというのが『火星兵团』の大筋であるが、この作品での火星人は、蛸のような姿をした生物であり、地球の環境に対応するためにロボットのような機械の中に入っていて、普段はその姿を見せることはない。地球の人々は、顔の見えない敵と戦うことになる。海野は、空襲に対する知識と恐怖感を持っていたようであるが、空襲というものも同じように、顔の見えない相手との戦いである。彼は空襲について詳しく(海野は空襲を題材にした作品もいくつか書いている)、それだけに恐怖心も強く持っていたことがうかがえる。アメリカとの開戦前に、すでに自宅に防空壕を作っていたという。空襲とは、空の上の、顔の見えない敵からの自陣への攻撃であり、受動的な防衛が求められるものである。そのような海野が持っていた、他者による襲撃に対する恐怖は、『火星兵团』にも現れているといえる。海野が『火星兵团』を書き、それが世間で人気となったのは、当時アメリカとの戦争が目前に迫っていたという、時代の雰囲気が関係していたと考えられる。

火星人という、地球全体に共通する敵が来た時、「地球人類」という意識が生まれるようになる。作品の舞台は日本であるため、登場人物たちは日本を守るために行動する

が、問題が地球規模になったとき、世界中の人々の問題となる。佃は、解題でこの作品について「火星兵団との攻防に〈地球人の連帯〉に触れられていない」ことが残念であるとしている。<sup>6)</sup>それぞれの登場人物には、「地球のため」という意識がないわけではないが、この作品では全世界が同じ目標のために手を取り合うという展開にはなっていない。国際情勢が悪化した時代においては、素直に世界中が協力するという話は書けなかったのかもしれない。

結局、最後に地球を救うのは、「蟻田博士」という優れた能力を持つ科学者の力であった。博士の開発した武器により火星人は反撃され、地球を追われることになる。海野は作品の中で、科学を学ぶことの大切さを訴えている。

「[…]これからは、火星人と競争することになるから、われわれ地球の人類は、これまでよりも、勉強をしなければ、大宇宙の指導者の地位を、火星人ととられてしまうよ。勉強だ、大勉強だ」蟻田博士は、拳をふりながら言った。(全集9, 427ページ)

少年向けの作品だけに、子どもたちに勉強を促すような言葉が、蟻田博士の言葉を借りて主張されている。このようなメッセージは、海野も意識的に書いていることが、『「火星兵団」作者の言葉』から見て取れる。海野は、そこで次のように書いている。

皆さんもよく御承知のとおり、いまや全世界は、二つに分れて、世界戦争を始めかけています。今度の大戦は、どっちかを完全に叩きのめしてしまうまでは、やめにならないでしょう。そして勝敗いずれかの鍵は、民族の精神の強弱と、そしてもう一つは、科学力の強弱にかけられていると申してもよろしいのです。<sup>7)</sup>

海野は「世界戦争」が始まることを予見し、日本に科学技術が足りないことを嘆いている。『火星兵団』読者である子どもたちに、科学技術を学ぶことの大切さを訴え、そして子どもたちに対し、壮大な、夢のある目標を提示する。

われわれ日本民族は、地球人類の先駆者として立ち、やがては地球全土を指導し、そしてまた大宇宙をも支配するという大きな希望を目標に、うんと勉強し、そして強く鍛えねばなりません。<sup>8)</sup>

この作品での火星人は、残酷な敵として描かれている。<sup>9)</sup>蟻田博士によれば、「残酷は、元来、火星人の持って生まれた悪い性質」(全集8, 287ページ)であるという。その残酷さの原因とは、火星人が「進化した動く植物」(全集8, 297ページ)であり、「情心は、動物だけにあるもので、植物にはない」(全集8, 297ページ)からであると、登場人物の一人である「新田先生」は考える。ただし、人間に変装した火星入「丸木」は誘拐した少年である「千二少年」

から情感を学ぼうとも試みている。彼は、「火星人は植物だから情心などなかった。しかし丸木は、火星入の中でもすぐれた人物だったので、このごろ情心というものを自分の心にも植えてみようと思った。」(全集8, 309ページ)のであるという。このように、火星入は情感というものを理解可能な存在としても描かれている。

海野は、『火星兵団』においては、憎むべき敵としての火星入を描いている。それは、戦争へ向かう日本の状況が反映されていると読むこともできる。しかし、残酷さだけを持つはずの火星入に、丸木のように情感を学ぼうとする姿勢をとらせていることから、そのような残酷さとは、変わり得るものであることも示唆している。敵であっても、いつか分かり合えるかもしれないということを、作品の中で暗示している。そしてこのような、他者との相互理解の可能性というテーマは、戦後に書かれる『火星探検』で示されることになる。

アメリカとの戦争が始まり、海野は昭和17年、東南アジアの戦場で従軍記者として働き、帰国後も創作活動を続けている。この時期には時代の影響もあり、軍事的な題材のものも多く書いている。そして、空襲の激しくなる東京に住み続け、終戦を迎えている。

## 2. 空白としての「他者」、『地球発狂事件』

海野は終戦時、家族とともに自決しようとしていたことが知られているが、その理由については、意見が分かれている。山下は、「一九四五年、日本敗戦の夏、海野一家は国に殉じ自殺を図る。彼の小説は決して好戦的ではないが、自分の小説が少年たちの戦意高揚につながったのではないかという自責の念が発端だった」<sup>10)</sup>と考えている。そうだとすると、海野は彼の創作物が、戦争、あるいは戦時中の社会に影響を与えていたと考えていたことになる。中尾は、この問題について、海野の作品内容から考えて、次のように考えている。「海野自身が、好戦的な人物だったとは思えない。なぜなら、作品のテーマが、つねに〈外的からの防衛〉になっている。」<sup>11)</sup>この「外敵からの防衛」とは、『火星兵団』でも見られた状況で、それは戦時中の日本が主張していた「自衛のための戦争」という考え方にも重なるものであり、当時としては一般に共有されていたといえる。

海野には、「狂信的愛国者」<sup>12)</sup>、「完全な軍国主義者」<sup>13)</sup>という評価もあるが、時代の影響を受けているだけであるという意見もある。秦は、「当時の一般的な国民としての愛国心はあり、その延長線上での戦意昂揚を促す作品はあったかも知れないが、あくまでも海野のライトモチーフは科学とその啓蒙である。彼はそこにSFという場所を与えた。そして、そのジャンルの設定上、戦前、戦中という時代を背景にして、兵器があり、戦場があった」<sup>14)</sup>と考えている。また、鳥越は、海野が軍国主義思想を持っていたとしながらも、「海野のもう一つの側面、科学者佐野昌一との間にひきおこした分裂、矛盾による悲劇性のようなもの」<sup>15)</sup>を読み取っている。そして、「主観的には軍国主

義を信じ、それを子どもたちにも鼓吹してきた一方で、その軍国主義が一切の科学的合理精神まで否定するほど狂信的に拡大されていったことに対する科学者としての矛盾、相克による自責の念が強かった<sup>16)</sup>と考えている。

海野には、科学者として冷静に物事をとらえようとする立場と、戦争へと突き進んでいった日本の一国民としての立場があった。終戦までは、その2つが統合され、作家としての海野が成立していた。1945年8月25日の日記には、「海野十三は死んだ。断じて筆をとるまい。口を開くまい。恥かしいことである」<sup>17)</sup>と、本名の「佐野」ではなく、ペンネームである「海野」が死んだ、と記している。終戦により、彼はその思想の基盤を失い、今までのように作家「海野十三」を続けることはできないと考えたのである。実際、『地球発狂事件』、『火星探検』などの終戦直後の作品は、「丘丘十郎」というペンネームで連載されていた（単行本出版時には海野名義に戻っている）。

それまで信じていた思想の基盤を失ったとき、作家としての生が失われたように感じていたことになる。彼に愛国者と科学者としての2つの側面があったとすれば、終戦後に彼に残ったのは科学者としての側面だった。そのことは、彼が戦後に書き始めたものからも読み取れる。

自決を思いとどまった海野は、1945年9月、未知の知的生命との接触を扱う『地球発狂事件』（1945）を「協力新聞」に書き始めている。この作品は子供向けではなく、一般向けのものであるが、彼が舞台として選んだのはアイスランドだった。日本から遠く、それほど接点のない国が選ばれているといえる。登場人物たちは、日本人、デンマーク人、アメリカ人などの多様な国から集まった新聞記者たちが主である。また作中では、戦争に関する言及はほとんどない。荒廃した日本の読者のことを考えると、彼は日本を舞台にすることはできなかったのだろう。

この作品の筋は、アイスランドの山中でソ連の巨大な船が発見されるという不思議な事件が起き、それを記者や学者が調査していくというものである。調査の結果、その事件を起こしたのは大西洋の海中に基地のようなものを作っていた（宇宙から来たかどうか不明な）謎の知的生命であることがわかる。人類よりはるかに進んだ科学力を持つ存在を前に、世界中で対策が考えられるが有効な手段はなく、人々はコミュニケーションをとろうと模索していく。結局その知的生命は偶然地球にたどり着いただけであることがわかり、ある日突然姿を消してしまい、物語は終わっている。

この作品で登場する地球外から来たらしい知的生命は、作品の最後のほうになるまで謎のままであり、人類には理解できない、「従来地球上にその存在を確認されたことのない高等生物の集団」（全集11、71ページ）と表現される存在である。それは、それまで地球上にあった知識、あるいは価値観では捉えることのできない存在であり、一種の「空白」のようなものとして、扱われている。

戦時中の日本の思想に傾倒していた自覚を持つ海野は終

戦後、それまで持っていた価値観を失ったことになる。「終戦の詔勅が下りて、私もまた完全に虚脱状態に陥っていた」（全集11、499ページ）と海野は連載開始のころを振り返っている。そのような喪失の体験ののち、終戦直後に書き始められたこの作品には、日本に生まれつつある新しい価値観に対する戸惑いのようなものが現れているのかも知れない。『火星兵団』での「他者」としての火星人が、「敵」として描かれていたことと比較すれば、この作品での謎の知的生命は、全くの謎のままであり、理解できないものとしての「空白」とでもいえるものである。

知的生命は、人類にとって脅威と考えられ、世界は一丸となって対策をとる必要に迫られていく。アメリカの上院議員によって、未知の知的生命を攻撃することが主張され、原子爆弾の使用が検討される場面もある。しかし、次のような意見も語られている。

一方で、「平和的な外交手段による交渉」が世界では支持されていた。平和的交渉論は、一応誰しも賛同するところであったが、この主張の弱点は、その具体的手段が見付からないことだった。（全集11、72ページ）

交渉をどのように行うか、全く手がかりがない中で、未知の存在に対しコミュニケーションをとるために、音楽という手段が試みられる。

[...]水中を伝わる超音波をもって、毎日のように怪人集団の城塞の方位へ向けて音楽を送ることになった。これは音楽というものが最も精神的な純粋な芸術であるところから、或いは怪人たちにも幾分理解されるのではないかという狙いだった。（全集11、89ページ）

未知の存在に対して、攻撃だけでなく、音楽という文化的なものを用いて平和的關係を築こうと試みていることは興味深い。

結局、その正体は分からないまま、突然彼らは姿を消してしまうことになる。海野はこの作品を書いた理由について、次のように書いている。

それは敗戦日本の小説家として、はたまた新時代の世界人種の一員として、書きたいと思ったことを書いたに過ぎない。書き終わって私は満足感を得た。私は当然なさねばならぬ義務の一つを果たしたと思うからだ。<sup>18)</sup>

彼が感じていた「義務」と「満足」とは、どのようなものであろうか。それは一つには、一度は「海野十三は死んだ」とさえ記した彼が再び日本の国民へ向けて作品を提供できたこと自体を指しているのかもしれない。さらに、一貫して「科学の振興」を作品の中で主張していたように、新しい時代を迎えようとする日本の人々に、良質の科学小説を

提供することができたという点からも彼は満足しているのかもしれない。また、戦中の価値観が失われた中で世界が協力し未知の存在に立ち向かうという、これからのあるべき世界像を提示したことも重要である。彼はこの作品の中で、「大西洋の海底に突如として現われた怪人集団は、地球人類をして、永年繰返された人類同士の戦争に対し見事に終止符をうたせることになった」（全集 11, 93 ページ）と書いている。彼は、この作品で、戦時ではない新たな時代の有り様を示したのであるが、世界から戦争をなくしたのは、人間よりも強い力を持った存在の登場であった。

### 3. 原子爆弾のある未来, エッセイ『原子爆弾と地球防衛』

終戦という大きな衝撃によって生まれた空白の時代に書かれた『地球発狂事件』では、当時の社会においてのもう一つの空白ともいえるべき、原子爆弾が直接的ではないが重要な役割を果たしている。船が山中で見つかった原因としてまず挙げられたのは原子爆弾であるし、謎の知的生命に対抗する手段としても言及されている。そこでは、原子爆弾は恐ろしいものとしてではなく、一つ的手段として、淡々と言及されているように見える。そこに、海野の原子爆弾に対する態度を読み取ることができるかもしれない。

海野は原子爆弾投下のわずか数か月後の 1945 年 10 月に、『原子爆弾と地球防衛』というエッセイを雑誌「光」に書いている。そこでは、当時は一般の人々にはほとんど正体不明であった原子爆弾について、その原理や威力について詳細な解説を行っている。その中で、彼は原子爆弾の投下を知ったときの気持ちを次のように書いている。

そして率直に告白すれば、アメリカが原子爆弾の製作に成功したと知ったとき、私は敵味方の関係を超越し、広島を惨状をも超越し、科学技術史上画期的なるこの成功に関しアメリカに対し祝意と敬意とを捧げざるを得なかった。そして又たいへん羨しく感じたことも告白せねばならない。（全集別巻 2, 306 ページ）

1945 年 8 月 10 日の日記には、「これまでに書かれた空想科学小説などに、原子爆弾の発明に成功した国が世界を制覇するであろうと書かれているが、まさに今日、そのような夢物語が登場しつつあるのである」（全集別巻 2, 72 ページ）と書いている。科学者としての海野は、当時においては SF の中だけと考えていたものが突然実現したことに驚愕したのである。

海野は原子爆弾については完全に否定的というわけではなく、世界の平和へと繋がる可能性を見ている。彼は『原子爆弾と地球防衛』の中で、「地球防衛」という概念を原子爆弾と関連付けている。

原子爆弾の実現したのを機会として、全世界はお互いの間に於ける一切の戦争を永久に終局とせねばならぬ。そして全世界は一致団結して協力し、地球防衛の一目

標に精進せねばならぬ。地球防衛とは何か。それは地球の敵より地球人類を護ることである。地球の敵とは何か。それはほかの遊星に棲息する生物で、われら地球を狙う者共のことである。（全集別巻 1, 309 ページ）

彼が SF 作品の中で主張してきたことが、一般の雑誌に書かれたものの中でも繰り返されていることがわかる。彼にとっては、地球外知的生命の存在とは、現実でも想定しなければいけないあり得ることとして考えられていたことになる。あるいは、現実のものとなった原子爆弾と世界平和を考えたとき、そのような存在を想定せざるを得なかったのかもしれない。

彼はまた、地球外知的生命との間での平和的な接触の可能性も視野に入れている。

尚、他星生物との交渉は、武力のみを以て解決せんとするのは策の得たものならず、よろしく別途に優れた平和的文化的なる外交手段の類をも用意すべきであると確信する。（全集別巻 1, 310 ページ）

海野は、原子爆弾の登場が世界から戦争という行為を終わらせるという発想を持っていた。それが彼の科学者としての分析であり、彼が考える戦後の世界平和の在り方だったことになる。彼は、原子爆弾の現実化を目の当たりにして、それがその後の世界に与える影響についても理解していた。そのうえで、彼は原子爆弾がある世界の平和についても科学者としての冷静な判断を行っていたといえる。実際、原子爆弾の実現が、その後の世界の在り方を大きく変え、冷戦状況を生み出したことを考えれば、海野の予測も間違っただけではなかったといえるかもしれない。

海野の原子爆弾についての意見は、終戦直後の原子爆弾の被害もまだ正確には伝わっていない時期であり、また検閲もあった中で、批判的なことを書くのは難しい時代であったということも関係しているのかもしれない。彼は戦中・戦後の日記の中で、原子爆弾について何度か記しているが、そこでは原子爆弾が人体に与えた影響についてや、予告もなく原子爆弾を投下したアメリカに対する非難も見ることができる。川村は、終戦後の日本に GHQ による検閲があり、広島、長崎の原爆の被害について言論統制が行われていたことを指摘し、「アメリカを憎み、その戦勝者による占領政策に大きく障害となることを、GHQ は最も恐れていたフシが見受けられる」<sup>20)</sup>と分析している。また、山本によれば、検閲によって原爆の被害が強調されることはなかったため、「占領前期にあたる一九四五年から四九年までは、多くの人々にとって、原爆は決して特別に恐ろしいものでも、忌避されるものでもなかった」<sup>21)</sup>という。そして、「[...]原爆の破壊力を何とか利用できないかという方向に、人びとの意識は向かっていった」といい、「桁外れの破壊力を知れば、世界の人々は戦争を起こそうという気持ちを捨てるのではないかという期待」<sup>22)</sup>さえ当時あっ

たという。海野の考えもまた、そのような流れの中に位置づけることができるだろう。

ところで、世界で未確認飛行物体（UFO）の目撃談が急増するのは、戦後になってのことであるという。<sup>23)</sup> また、UFOが地球外知的生命と関連付けられるようになったのも戦後のことであるというが、そこにはやはり原子爆弾の登場がかかわっている。原子爆弾の光は宇宙からでも観測可能であり、その光を人類が発したことによって、地球に知的生命が存在していることがほかの地球外知的生命に知られるようになった、というのがその論理であるという。<sup>24)</sup> SF的なものであった原子爆弾が実現したことで、海野にとって現実とSFとの境界があいまいになったのと同じ構図であり、同時代的なものともみなすこともできるだろう。

#### 4. 友人としての「他者」、『火星探検』

海野は子供向けの作品として、小説『火星探検』の連載を、1945年12月から始めている。この作品は、大戦中ではありえなかっただろう、アメリカが舞台<sup>ちやん</sup>となっている。アメリカを、「河合」、「山本」、「中国人の張」、「黒人のネッド」という多国籍なメンバーの少年四人が旅をするという話である。四人は自動車<sup>ちやん</sup>で旅をしていく中で、偶然が重なり「火星探検協会」という団体が打ち上げようとしていたロケットに乗ってしまい、火星まで到達することになる。

海野はそれまで、イギリスやドイツを作品の舞台に設定したことはあるが、アメリカは珍しいといえる。戦後直後に書いているこの作品で、読者である子どもたちに、アメリカという国へ良いイメージを与えようとしたのかもしれない。また、日本の荒廃した風景の中では、彼は日本を舞台に希望の物語を書くことはできなかったという背景もあるだろう。

この作品は、戦後に再び書き始めてから最初に書いた子ども向けの小説である。そこに描かれるのは、地球を侵略しようとする残酷な敵ではなく、明るく牧歌的なアメリカの風景と、「原子エネルギー・エンジン」（全集11、154ページ）を動力としたロケットに乗って火星にまで到着するという夢のような物語である。

偶然が重なり、アメリカを旅していた少年たちは火星へ向けて出発することになる。そして、火星に無事降り立ち、そこで火星の生物と対面する。火星にいたのは、人間とは大きく姿の異なる奇妙な火星人たちであった。火星人との接触では、誤解により険悪な関係になりそうになるが、少年たちは「電気蓄音機」を使い、「證誠寺の狸<sup>しょうじょうし</sup>ばやし」（全集11、193ページ）という地球の音楽を流すことにする。音楽をかけ、少年たちが踊ると、火星人たちも体をリズムに合わせて左右に振り始める。少年たちはそれを見て、「火星人は音楽がわかる」（全集11、193ページ）ことを知る。音楽をきっかけに少年たちは火星人たちと争いなく接触することで、平和的な関係を結ぶことに成功し、そこから火星人と地球人との交渉が始まる。音楽による接触というの

は、『地球発狂事件』でも見られた発想である。音楽という直観的に理解できる共通の言語を介し自分たちの固有の文化を伝えることで、姿や知能、科学力の差を超えて仲良くなれるということを、海野は子どもたちに伝えている。

瀬名は「〈火星探検〉では、従来の作品に見られた火星人と地球人との戦闘がなく、地球人との友好関係が強調され、文明的にも地球のほうが高い状態に設定されている点が、旧作との大きな相違であった」<sup>25)</sup>と述べている。確かに、火星人のほうが地球より進んだ科学力や知能を持っているように描かれるが、その差はそれほど大きくはない。地球人と火星人との間には、言葉（火星人たちが事前に学んでいた「アメリカ語」）によるコミュニケーションがあり、交渉も可能である。その交渉の過程で、火星人たちは、地球人が火星の資源を奪うための侵略に来たのではないかと疑うが、それに対し、少年の一人山本は、次のようにいう。

しかし今はもう侵略戦争は根がやしになりました。そのわけは、戦争の惨禍というものが、負けた国の人々にはもちろんのこと、勝った国の人々にもふりかかってくるのが分り、戦争は地球上のすべての人々に大きな不幸をもたらすことがよく分ったのです。だからもう戦争には懲りて、どの国でも戦争を起すことはやめたと宣言しているのです。これで地球には万世の太平が来たのです。この万世の太平は、地球の上だけのことでなく、惑星と惑星の間にも約束されねばなりません。（全集11、199ページ）

1946年11月3日公布されることになる日本の新憲法にも書かれている、戦争放棄という方向性がすでに示されている。ただしそれは、日本だけではなく、世界中の国々に同様であり、戦争のない理想的な未来のあり方が描かれている。そこには、戦争への反省の気持ちがあるといえるが、ここにも、核兵器の存在が戦争を無意味にするという発想が関連しているのかもしれない。

それから半年の後、地球人と火星人の合作による新宇宙艇の建造はめでたく完成した。この新艇に「太陽の子」という名前がつけられた。火星も地球も共に太陽の子であるという意味を含めたもので、同じく太陽の子である以上、仲よくしましようという平和精神が盛られてある。（全集11、204ページ）

火星と地球の間には定期航路が開かれ、資源を融通し合い、文化学術交流が始めるという、二つの星の交流と共存の可能性が描かれている。その後地球には、「火星使節団」（全集11、205ページ）が降り立ち、地球の代表と交渉が行われる。そして、太陽系の惑星の間で、「平和連合星団」（全集11、205ページ）の建設までが約束されることになる。

『火星探検』の連載は1946年11月まで続けられた。自分の書いたものに責任を感じ自決を考えたように、海野は

自分の作品が社会に与える影響に自覚的であった。終戦後に子ども向けとして書かれた『火星探検』では、明らかに「他者」としての火星人ととの関係が、「敵」から「共存できる仲間」へと変わっている。終戦からアメリカ軍の進駐という、戦後の不安定な時期に、状況の変化に戸惑う子どもたちへのメッセージとして、突然現れた「他者」とも友好的な関係を築けることを海野は示しているといえる。

この作品で海野は、新しい社会に対応した方向性を子どもたちに示している。それは、海野自身にとっても、「書くこと」によって新たな状況に適用していった過程とみることもできるかもしれない。

## 5. おわりに

3つのSF作品を手がかりに、大戦期を挟んだ海野を見てきた。SFとは自由な発想で書くことができるジャンルであるとともに、時代の影響を受けることもありうる事が確認された。特に、終戦を挟んでの彼の書いたものの変化に注目したとき、海野という人間がどのように構成されていたか、時代の中で愛国者という側面を持つ一方で、冷静な科学者の目を持っていたことが明らかになった。海野は地球外知的生命が登場するたくさんの空想の世界を描いてきた。それは荒唐無稽なものとも表現することもできかもしれないが、海野は科学的知識を背景にし、彼なりのリアリティを追及していたといえる。そのような面から見ると、SF小説とは、おとぎ話と現実世界における未来予測の間に存在しているといえる。

現在では様々な方法で、「地球外知的生命体探査(SETI)」が試みられているように、宇宙に生命がいる可能性があることについては、多くの科学者が否定していない。2015年にはアメリカで、宇宙人との接触を積極的に試みるべきかどうかについて、議論になっているという。地球外知的生命が地球に来る場合、幸せな接触だけではなく攻撃を受ける可能性もあるというのが、反対派の意見である。それは、地球外知的生命について科学的に想定した結果生まれた意見であるが、未知のものを正しく想像することはできない以上、そこにはすでに知っている存在(=人間)についての知識が基礎となっているといえる。人間の自己像が、未知の地球外知的生命に投影されているのである。相手が攻撃するのではないかと疑うとき、その背後には自分たちも相手を攻撃するかもしれないという恐れが隠れていることになる。それは人間が考える、人間の本性のようなものが表れているということなのかもしれない。海野も、地球外知的生命との接触については危険性を感じている一方、友好的な関係を築ける可能性も作品の中では描いているが、それは人間の持つ多様性の表れともいえるだろう。彼は作品の中で、より上位の存在としての地球外知的生命を描き、世界の連帯を呼び掛けてきた。それは物事を相対化できるというSFというジャンルの持つ機能があるからこそ、可能であったといえる。そのような海野の視点は、現代においても重要なものであるといえるだろう。

## 参考文献

- 1) 海野十三(佐野昌一)の伝記的事柄に関しては、主に三一書房から発行された『海野十三全集』の解題と、以下の記事を参考にしている。  
山下博之「モノクロ・グラビア ヒューマン・アルバム 海野十三」(『潮』510号、潮出版社、2001年)、213～220ページ。
- 2) 小松左京『SF魂』新潮新書、2006年、175ページ。
- 3) H・G・ウェルズ(井上勇訳)『宇宙戦争』東京創元社、1969年。
- 4) 海野十三『海野十三全集11』三一書房、1988年。(以下、本書からの引用は本文中にページ数を記す。)
- 5) 海野十三『海野十三全集8』三一書房、1989年。(以下、本書からの引用は本文中にページ数を記す。)
- 6) 佃実夫「『火星兵団』解説」(海野十三『火星兵団』(海野十三傑作選③)沖積社、2002年)、327ページ。
- 7) 海野十三「『火星兵団』作者の言葉」(海野十三傑作選③)巻頭。
- 8) 海野十三「『火星兵団』作者の言葉」(海野十三傑作選③)巻頭。
- 9) ただし、作中では、人間と友好的な関係を築こうとしていた火星人の女王ラーラについても言及されている。「我々地球の生物のように、やさしい情ある心を持っていた。だから女王は、地球の人類と、たがいに手をとって、力になり合おうと考えた」(全集8、287ページ)
- 10) 山下博之「モノクロ・グラビア ヒューマン・アルバム 海野十三」、219ページ。
- 11) 中尾明「SF少年小説の変貌—海野十三の亡霊—」(『日本児童文学』34号、日本児童文学者協会、1988年)34ページ。
- 12) 山下武「よみがえる作家たち—その世界 海野十三」(『国文学解釈と鑑賞』45号、至文堂、1980年)158ページ。
- 13) 鳥越信「海野十三の少年SF小説」(『国文学 解釈と教材の研究』20号、学灯社、1975年)、159ページ。
- 14) 秦敬一「海野十三の位置—時代を体現したSFの先駆者—」(『語文と教育』21号、鳴門教育大学、2007年)29ページ。
- 15) 鳥越信「海野十三の少年SF小説」、159ページ。
- 16) 同上、160ページ。
- 17) 海野十三『海野十三全集別巻2』三一書房、1993年、78ページ。
- 18) 瀬名堯彦「『海野十三全集11』解題」、499ページ。
- 19) 海野十三『海野十三全集別巻1』三一書房、1991年。(以下、本書からの引用は本文中にページ数を記す。)
- 20) 川村湊「トカトントンとピカドニー〈復興〉の精神と〈占領〉の記憶」(『近代日本の文化史8』岩波書店、2002年)、328ページ。
- 21) 山本昭宏『核と日本人』中公新書、2015年、3ページ。
- 22) 同上、5ページ。
- 23) 木原善彦『UFOとポストモダン』平凡社新書、2006年、12ページ。
- 24) 同上、45ページ。
- 25) 瀬名堯彦「『海野十三全集11』解題」、501ページ。

